The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	就学前児教育における映像メディア
Author(s)	森田, 健宏
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56023
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　森田健宏　）	
論文題名	就学前児教育における映像メディア

論文内容の要旨

現代の子ども達の多くは、デジタル・ネイティブ（Digital Native）という言葉に説明される通り、生れながらに様々なメディアに囲まれて育っている。そして、子ども達はメディアを使って遊ぶことや学ぶことにより、多くの情報を受容している。しかしながら、子どもとメディアとの関係については、理解できる内容や条件、さらには適切性や利用可能性などを含め、未解明な内容が数多く存在する。

そこで、本論文では、就学前児教育における映像メディアの利用に注目し、当該分野に関連する国内外の様々な議論や提言の内容を検討すると共に、就学前期の認知発達に関する基礎的な知見をふまえ、映像表現に応じた理解内容の違いについて、就学前児を対象とした実験により検討した。その結果、以下の新たな知見を得た。

第一に、海外における就学前児と映像メディアに関する文献調査から、バックグラウンドメディア（子どもが映像メディアの視聴以外の活動を行っているときに、映像や音声が流れている状態）や入眠時における映像メディアの単独視聴の影響など、今後、日本においても新たに検討が進められるべき知見を見出し、詳述した。

第二に、国内における就学前児と映像メディアに関する文献調査から、1979年に設置された「２歳児テレビ研究会」を契機に、就学前児への映像メディアの教育利用について、多様な学問分野による学際的な研究が展開された経緯があることを確認し、その詳細な手法や内容について検討し、まとめた。

第三に、就学前児教育を担う保育者を対象とした質問紙調査の結果から、教育現場における映像メディアの利用についての様々な不安や、映像メディアの教育利用に必要とされる知識が未だ十分でないことなどを明らかにした。

第四に、映像メディアの表現技法について、ＮＨＫ幼児向け教育番組を対象に分析調査した結果から、教育内容や注視を促す場面に応じて映像技法の使用頻度や内容が異なっていることを明らかにし、映像メディアを教育場面で利用する上での、表現技法に配慮する必要性について言及した。

第五に、映像メディアの表現の違いによって、就学前児の理解内容が異なるかを実験的に検討するため、水族館内を巡覧するという題材のＣＧ映像を用意し、さらに、これを子どもの視点に相当する主観型映像と、画面に他者が登場することにより三人称的な視聴となる傍観型映像に編集加工して、幼稚園４歳児及び５歳児各５０名にいずれかを視聴してもらい、その後、テスト法によって理解内容を比較検討した。その結果、２種類のテスト法のうち、画面に提示される対象を理解する対象理解課題では、主観型映像群の方が傍観型映像群よりも成績が良く、一方、映像内に表現される経路移動を理解する移動理解課題では、傍観型映像群の方が主観型映像群よりも成績が良い、という結果を示した。

以下、各章の概要を述べる。

第１章では、就学前児教育と映像メディアに関する研究の必要性と、関連する議論の概要を示し、本論文における研究の目的と検討のあり方について説明した。また、本論文における論の構成を図示し、研究の展開を明確にした。

第２章では、就学前児と映像メディアについて、教育学、小児医学、生理学、発達心理学、映像学、人間工学など、関連する研究分野の知見を国内外から幅広く収集し、これらを総合的に検討することによって、現状及び今後想定される課題について明らかにした。その結果、第一に、海外については、世界各国の就学前児教育と映像メディアに関する研究や教育実践、医療、さらには政策にも影響を与えている「アメリカ小児科学会（AAP）」と「アメリカ幼児教育協会（NAEYC）」というアメリカの２団体による最新の提言書について詳細な検討を行った。これにより、当該分野の世界的な研究動向を確認でき、その中から、子どもが映像メディアの視聴以外の活動を行っているときに映像や音声が流れている状態であるバックグラウンドメディアや、入眠時における映像メディアの単独視聴による心身の発達への影響など、今後、日本においても新たに検討されるべき研究知見を明らかにした。第二に、国内における就学前

児教育と映像メディアの利用に関する研究について様々な分野の文献を調査し、まとめた。特に、これまで国内でも、1979年に発足した２歳児テレビ研究会のように、就学前児教育に適した放送番組を開発するために、教育工学や発達心理学など、多分野の知見を集成して検討されてきた事例があることから、その経緯や研究成果を確認すると共に、時系列的分析法や幼児の評価方法など、今後、新たな研究においても継承されるべき点を見出した。さらに、就学前児教育の現場において、映像メディアの利用が進みがたい理由に関して、保育者を対象に質問紙調査を行った。その結果、保育者が映像メディアの利用について様々な不安を抱いていることや、メディアの教育利用に必要とされる知識が現代においても未だ十分でないという課題を明らかにした。

第３章では、就学前児教育を対象とした映像メディアの表現のあり方について検討するため、まず、映像に使用される表現技法の種類と特徴、効果について文献調査をもとにまとめた。次に、ＮＨＫ幼児向け教育テレビ番組を対象に、表現技法の使用状況や映像表現の種類についての分析調査を行った。その結果、表現技法の使用頻度や使用場面について、対象を注視しやすくするための効果や複数の視点から比較するための効果など、各番組のねらいとする保育内容の領域や、理解を求める内容に応じて、様々な配慮がなされていることを見出した。また、映像メディアの表現技法については、映像文法としての効果ばかりでなく、感性的な効果をねらいとした使用があることについても言及した。さらに、映像メディアの表現の違いによって理解の容易性が異なる可能性も考えられることから、今後、映像の表現について様々な比較条件を設定し、実証的に検討していく必要があることを述べた。

第４章では、就学前児の映像メディア視聴時における内的状態について検討する方法として、生理学指標を用いることを計画し、その研究手法の特徴と研究の動向について、文献調査を中心に関連知見をまとめた。特に、本論文における調査対象が就学前児であることをふまえ、調査を受ける状況や環境への配慮と、非侵襲的手法かつ身体拘束性、器具等の接触不快感の少ない測定条件を検討した。その結果、心拍と瞬目が指標として利用しやすいことを見出し、これらの詳細な分析方法や評価のあり方について関連分野の文献をもとに検討した。さらに、日本生理心理学会の過去10年間の学会誌論文および学会発表論文1,168件を対象に、それぞれの研究で使用されている生理学指標について調査し、分類した結果をまとめた。これにより、近年、中枢神経系の研究手法が比較的多い中、心拍や瞬目などの末梢神経系の研究手法にも一定の支持があることを確認した。

これらの知見をもとに、第５章では、就学前児を対象に、映像メディアの表現の違いによる理解の内容について実験的に検討した。具体的には、６種の海の生き物が提示される水族館のＣＧを作成し、これを主観型映像（視聴者の視点による表現形式）と傍観型映像（映像内に先導する他者を挿入して、傍観的に視聴する表現形式）の２種の映像表現に編集して、幼稚園４歳児及び５歳児各５０名にいずれかを視聴させた。視聴後には対象理解課題、移動理解課題という２種類のテスト法による査定を行った。その結果、対象理解課題については、主観型映像群の方が傍観型映像群よりも成績が良く、移動理解課題については、傍観型映像の方が主観型映像よりも成績が良かった。これらの結果については、表現の違いによって得点差が見られた理由として、映像内に他者が挿入されることによって、対象への注意の向きやすさや、他者の存在による移動情報の認知のしやすさが異なったことを推測した。なお、追実験として、上記と同様となる実験状況を設定し、幼稚園５歳児の６名を対象に、心拍および瞬目の測定を行ったが、映像の視聴時において、心拍にゆるやかな周期的変動が見られたことや、瞬目では、映像視聴中に瞬目間隔が20秒間以上となる事例が４名に見られたなど、時系列的に見て実験前とは異なる反応をいくつか確認したが、主観型映像と傍観型映像との間に顕著な差異は確認できなかった。

以上の研究成果より、就学前児教育における映像メディアの利用について、就学前児の心身の発達状況をふまえ、映像メディアの視聴環境や、映像の表現技法と理解のされ方など、多様な条件について検討すべき内容があることを明らかにした。特に、第３章の分析調査および第５章の実験により、就学前児に対して理解を求める内容に応じて、映像の表現技法の工夫や配慮を行うことにより、映像がより理解しやすい内容になる可能性があると考えている。
そのためには、今後、さらに詳細な条件設定による比較結果の蓄積が必要である。また、実験において、心拍、瞬目という生理学指標による内的状態の測定を導入したところ、就学前児を対象とした映像視聴場面の検討においても適用可能であることを確認した。このことにより、テスト法の結果のみならず、映像視聴時やテスト時における回答過程について詳細に検討できる可能性があり、今後、さらなる実験において、テスト法などと併用していくことを計画している。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　森田健宏　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	前迫孝憲
	副 査	教授	三宮真智子
	副 査	准教授	西森年寿

論文審査の結果の要旨

申請者は、就学前児の映像メディア利用に着目、国内外の議論や提言を検討すると共に、認知発達に関する基礎的知見を踏まえ、就学前児教育に関連するさまざまな内容について実験等を行いながら検討している。

第１章では、研究の目的と構成を示している。第２章では、関連する研究分野の知見を国内外から幅広く収集・検討しており、特に「アメリカ小児科学会（AAP）」と「アメリカ幼児教育協会（NAEYC）」による提言について詳細に分析、バックグラウンドメディア（意図しないで映像や音声が流れている状態）や入眠時における映像メディアの単独視聴の影響など、検討すべき対象や状況を明らかにしている。また、就学前児教育を担う保育者を対象に質問紙調査を行い、教育現場における映像メディアの利用についてさまざまの不安を抱えていることや、知識が十分でないことなどを明らかにしている。第３章では、幼児向け教育テレビ番組を対象に表現技法の使用状況等を分析、各番組のねらいとする保育の領域や理解を求める内容に応じて多様な配慮がなされていることを見出しており、映像メディアを教育場面で利用する際などに適切な対応が望まれることを述べている。第４章では、過去10年間の関連学会誌論文等を対象に生理学指標の利用状況を調査・分類した結果、中枢神経系に関する指標が増えている中、心拍や瞬目などの末梢神経系に関する指標も続けて利用されていることを確認している。第５章では、映像表現の違いによって就学前児の理解状態が変化するかを検討するため、水族館内を巡覧中に生き物が提示されるＣＧを作成、これを主観型映像（視聴者の視点による）と傍観型映像（先導者の映像を組入れ、傍観的に視聴する）の２種類に加工・編集して、幼稚園児計１００名に視聴させ、視聴後に、提示された生き物を問う対象理解課題と移動経路を問う移動理解課題の２種類のテストを行ったところ、対象理解課題については主観型映像群の成績が良く、移動理解課題については傍観型映像の成績が良いことを見出している。さらに、幼稚園児６名を対象に、課題遂行中の心拍および瞬目の測定を行い、就学前児の映像メディアの視聴状況が生理学指標に反映されていることを確認している。

就学前児の映像メディア利用の影響や課題、教育における有用性を解明するには更なる研究の積み重ねが必要と思われるが、本論文はその可能性を十分に論じていると評価できる。

以上により、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判定した。